

## 阿壘の四十年代における特異性に關する考察

關 根 謙

### 一 序

近年中國ではいわゆる「七月派」に關する研究が急速に進みつつある。胡風事件そのものの眞の姿を追究する論著や、事件の被害者及びその家族・友人たちの悲劇を明らかにするものなどはもとより、胡風とその同人たちの文藝思想を發掘し、分析するものまでも刊行されはじめた。賈植芳<sup>1</sup>は、この傾向を「現代文藝界の三つの『熱點』」の一つ（他の二つは「反右派闘争の眞實」「文革の眞實」）と指摘している。とりわけ注目したのは、その廣がりがかつてなく廣範なものになり、今まで擧げられなかつた文學者の作品の刊行と再評價が行われていることである。たとえば一九九六年に刊行されたばかりの『無夢樓隨筆』<sup>2</sup>などは、中國の若手研究者の情熱を如實に傳える成果の最たるものと言えよう。

阿壘<sup>3</sup>に關する研究も、こうした彼らの努力によつて、すでに一定の展望を持ちうる段階にまで達しつつあると思われる。こうした文學的潮流の中で、昨九八年五月に出版された『殉道者』<sup>4</sup>において、著者萬同林は阿壘について次のような評價を下した。

詩自體の意義から見ると、阿壘の才能は時に胡風や艾青および他

の同人たちを超越していた（中略）阿壘に一種の宗教的な感覺が備わつていたことにより、その詩作にはある種の思索的な息づかいが注入され、多くの詩篇に宿命のような「預兆」或いは一生の定めの際諭とが付與されることとなつた。彼には張中曉<sup>5</sup>の持つニーチエ的な敏感さがあつたばかりでなく、キュルケゴールの持つ奇る邊のない孤獨の實感が常に付き従つていた。この點に關して、胡風とその同人たちは必ずしも理解してはいたわけではなく、彼自身さえもはつきりと自覺してはいたわけではなかつた。

阿壘は胡風の同人の中にあつて特異な魅力のある詩人である。聖者、阿壘。彼の優美な詩篇は無意識の状態において人生を「預見」し、未來を「預言」した（中略）人生を愛し、詩を愛する人よ、阿壘を記憶してほしい！阿壘との對話は、卑劣なものに高尚さを教え、凡庸なものに昇華を與え、偉大なものには平凡が何であるかを見せてくれるだろう。彼の詩には現代の人格的な「聖書」が培われている。人々はその中から自身自身の淨化と安寧を見いだすだろう。阿壘よ、安らかに眠りたまえ。縁あつてあなたに詩に觸れるすべての人々の魂は、あなたと共にあるのだ。

これは阿壘の詩の特異性と其の文學の到達點および阿壘の人格に關

する簡潔明瞭な評價であり、今までの論者が誰一人として言えなかつた論點である。言うまでもなく萬同林の下した「聖者、阿壘」という語は、阿壘に關する最高の評價である。また現代文學研究上の問題としては、路莘の指摘する次のいくつかの點が注目される。

胡風事件の研究は文學理論の問題を無視するわけにはいかない。もしなければこの事件はまったく根據をなくしてしまふからだ。このような一大事件を胡風の個性の缺陷が原因だとしてしまふのは、著しく妥當性を缺く態度といわねばならない。

この事件自體に關して多くの人は、一九五五年から一九八〇年までのこととして語るが、それ以後、つまり八、九十年代に起こつたこともこの事件とのつながりにおいておろそかにできない。

政治的な立場を抜きにして、文學の價值だけについて見ても、阿壘の詩論は後世の誰一人として越えられたものはないと言え

る。路莘は政治的な事件の現象として文學を考へるのではなく、中國政治の枠組み全體を文藝批評の對象として捉え直し、作品自體の持つ意義を明確にしようとしている。そしてその考察の途上で阿壘の詩論に高い評價を下しているのだ。こうした方法論自體かつてほとんど採られていなかった。實際、近年の論調の中にも、特殊な政治的價值を第一に置く姿勢があることは否めない事實で、たとえば潘頌徳の阿壘評價や嚴家炎の「七月派」に對する評價などにおいても、やはり政治的<sup>①</sup>な一種のこだわりの存在を私は感じざるを得ない。このような狀況下における路莘の指摘は、一步進めていふならば、現代文學の研究者の負う責務を端的に言い表したものである。この路莘の言を繼ぐ立場

から、小論では、阿壘の「特異」な詩論の完成と充實した詩作の展開を一九四五年を中心とした數年間に求め、阿壘文學の内包する諸問題を検討してみたい。その方途として私は、胡風の文藝論との差異に注目し、阿壘のタゴールへの傾斜とその「愛」の感覺を中心に考察を進めていこうと思う。

## 二 雜誌「七月」と「希望」

まず四十年代の特徴について、胡風らの二つの雜誌の相違を通して述べてみよう。

胡風自身は「七月」の編集方針を、以前の言動については問わず、そのとき現在、抗敵活動に参加さえしていれば、とりあえず肯定的に捉え、以前の言動については今後の事實で證明するに任せるというものだつたとし、編集者としては、作者が描いた人物の實像を明確には知り得ないので、文責は作者自らが負う方針を取らざるを得なかつたと述べている。「七月」の柱として胡風が考へたものは、戦闘と戦時の日常生活に關する散文、その報告(ルポルタージュ)、これに加えて詩の三ジャンルであり、抗敵の心情が讀みとれば極力掲載する方針だつたこと、そしてまた、もちろんこの方針があつたからこそ、多くの新進文學者を輩出したことは、すでに議論の餘地がない。

一方、「希望」は「七月」廢刊の四年後、日本軍國主義敗北を目前にして誕生した。この間、彼らの影響力は、胡風が「希望」創刊號編集後記に述べたように、「思想的な力量」において格段に大きくなつていたと言へる。「希望」はこうした實力を基礎に、ある鮮明な主張の下に刊行された。それは「主觀主義」による中國の現状の表出である。すべての掲載作品が、そのジャンルを問わず、この理念の理解者

の創作であつた。特に理論面での論述の構成の堅固さは、「七月」と比較にならない。

この二つの文藝雑誌の間に横たわる年月は、中國現代文學史上決定的な時期である。「七月」(一九三七年九月、上海で創刊)は日中全面戦争の二ヶ月後に創刊されるが、これは言うまでもなく、魯迅の死を挟む二つのスローガンを巡る激烈な論争の直後であり、これに引き續き、民族形式・大衆化を巡る論争、整風問題、延安文藝講話などが文學者の心を激しく搖さぶつた。多くの論者の指摘するように、この時期の初期に胡風はその「主觀主義」の理念を固めた。「希望」の創刊される一九四五年は胡風から見れば、様々な悪條件があつたものの、まさに氣力の最高に充實した時期であつたと言える。一方阿壘は、前期の詩風から明らかな變遷を見せる段階にあつた。多くの詩論とともに深い思索に裏付けられた創作を次々と發表するのである。一九四五年、この二人はともに、このようないわば「筆のもつとも牙える」時期にあつたと言える。これはその他の同人たちにとつても同じように言えるのだろうと思う。胡風から見れば、「七月」によつて切り開かれた地平が「希望」の花を開いたと言えるのだろう。

「希望」創刊號を飾つた主要な文章には、明らかに有機的なつながりがあつた。それらはつまり、胡風「置身在爲民主的鬭争裏面」、舒蕪「論主觀」、阿壘「箭頭指向」、路翎「羅大頭底一生」の四篇である。

創刊號は胡風の卷頭論文「置身在爲民主的鬭争裏面」を中心に展開する。胡風は現實の人生との格闘によつて得られる「生きた感性」を藝術の基本的な源と考へた。この感性は現實を鋭く見つめ、同時に作家自身の精神を鍛えていく。これを彼は「主觀力量」と呼んだ。この「主觀力量」による創作は現實の個別な對象を凌駕する藝術世界を創

出する。そしてこれこそが、現實の人生と鬭争から遊離する「客觀主義」に對する「現實主義の鬭争」であると主張するのだ。

舒蕪の「論主觀」は胡風の文藝觀に哲學的な考察を加えて、強固な根據を作り上げた論文である。その論理の明快さと言辭の激しさは、若き文藝理論家の姿を充分に彷彿とさせる。また論文執筆當時、彼と路翎との緊密な關係、さらに成都での雑誌「呼吸」における彼と阿壘の掲載作品のコンビネーションなど、すべてが舒蕪のこのグループにおけるこの當時の重要な位置を物語つてゐる。

路翎の「羅大頭底一生」はまさに胡風理論の作品化と言える。これも細かく論ずる紙幅がないが、魯迅の「阿Q正傳」を強く意識し、なおかつ、主人公の悲劇的な覺醒のわずかな可能性に焦點を當てた作品である。作品構成の緻密さは出世作「飢餓的郭素娥」を越えていると思われ。彼はこの作品で、退廢墮落した主人公とそれを取り巻く封建的退嬰的な中國山村を無慈悲にそして徹底的に描き、その中で、主人公達の心の底に眠る抵抗の意識を探り出した。この點で、この作品は明確に胡風理論の作品化となつた。

こうした構成の中で、阿壘は「箭頭指向」という表題で散文詩の形式をとり、胡風に呼應する詩人論を展開している。阿壘は次のように語る。

詩は内から外に向かうものであり、外から内に入るものではない。

農夫が自らの苦勞によつて作られた綠玉のような作物を撫でながら贊嘆の聲をあげるとき、その農夫は詩人である。

詩は火種だ。それは自らを燃焼することから始まつて、やがて世界を燃焼させる。

これは阿壠の基本的な主張であるが、これが胡風の言う「主觀主義」とまったく合致していることは明白である。こうして、「希望」創刊號には、胡風の言う「主觀主義」による創作と文藝論が全編を一貫していった。

しかし同時に、阿壠の詩人論には次のような展開があり、そこに彼の特異性を見ることが出来る。

1. 自分が鳳凰だからといって碧梧の枝の上で威張りちらしてはいけない。瓦礫の中のコオロギでさえ琴を弾くことができるのだから。その音色をおまえば眞似することもできないのだ。<sup>19)</sup>

2. 愛情と戦争とは發展した矛盾の統一である。大いなる愛情がなければ大きな戦争はあり得ない。愛があるからこそ憎しみがあるのだ。戦闘は愛をもつて起點とし終點とするもので、陸上競技場のレースのようなものだ。假に愛情を果肉とすれば、戦闘はその果肉を包み守る堅い棘のある外殻のようなものだ。<sup>19)</sup>

3. 詩人の創作は妊婦の出産と同じだ。破裂の苦痛が肉體を突き破るものではなく、魂を突き破るもので、陶酔の歡喜が肉體の陶酔ではなく、魂の陶酔であるのだ。<sup>20)</sup>

1は鳳凰とコオロギの存在價值について、2は愛情と憎悪(戦争・戦闘)の辯證法について、3は詩人の苦痛と歡喜について述べたものであるが、ここに描出される詩人の世界は、先鋭な自我の意識によつて成り立つものであり、藝術の創造に従事する喜びに満ちたものである。政治戦略における文藝工作者の任務の觀點よりも、藝術を指向するものの「心性」に、論が傾斜していると見られないだろうか。この時點に於いて、こういう微妙な差異が、すでに少しずつ展開し始めていたことも見逃せない事實であつた。

### 三 胡風と阿壠の微妙な差異

胡風と阿壠の微妙な差異については、すでに萬同林が一種の傾向の差として端的に述べている。このような傾向の「差」をもたらしただのは何か。もちろん文學者としての資質の差と言つてしまえばそれまでであるが、より中心的で決定的なことは、文藝における「政治」の位置に關する概念の相違(あるいは感覺的な差異)であると思われる。

胡風の文藝觀における「政治」はきわめて當時の狀況に密着した、いわば政治戦略的な意識を強く持った「政治」であつた。たとえば胡風は次のように語る。

(「民族革命戦争で獲得された基礎」について) 第一は國民の精神を普遍的に奮い立たせたことであり……第二は啓蒙教育活動の廣大な展開である。<sup>21)</sup>

(「いくつかの結果」について) 第二に、既成作家たちは自己再教育の道を歩み始めた。それは一般的には深刻な過程であるといわれる……そこで彼らは預想もしなかつた新しい天地を發見し、これによつて彼ら自身の認識を豊富にし、修正さえもするに至つた。またこれにより、その創作方法を高めたり改めたりし、さらに廣々とした道へと歩みはじめたのである。<sup>22)</sup>

ここに見られる論調はこの時代の胡風の基本的な立場であつたと言える。このように強調される「啓蒙」と「改造」に即して言えば、胡風の政治的な文藝觀は社會主義文藝理論に原則的に添う形で展開しており、毛澤東の延安文藝講話の理念に近いものと見ることができよう。胡風は當面する政治課題あるいは文藝の今日的課題を常に意識していた。またそれゆゑに彼は柔軟な考えを持ち得たのである。

一方、阿壘にとつての「政治」は、ほとんど「生活」「人生」と同義語であつた。

(詩に込められる) いわゆる政治内容とは、政治上の出来事や政治的な要求と詩で直接切り結ぶものばかりではない。生活の情緒を通してその日常の様相や感覺、或いは衝動といったものを描くことでも、まったくかまわないのである。

ため息も政治である。リンゴの木も政治である。<sup>(28)</sup>

いわゆる政治内容とは、覺醒した勞苦人民の戰闘要求でもって現實生活の眞實を突き破り昇華させるもので、人民の政治闘争を豊かにし、これと結合するものである。これは政治概念の空虚な反復ではないし、また絶對にそうであつてはならないのである。

あの内から外に向かうものではない、いわゆる「注入方式」の政治概念とはまったく違うのだ。<sup>(29)</sup>

「ため息も政治である」「リンゴの木も政治である」と彼は言う。「社會性を持つてはじめて人間と言える」と主張する「七月派」の共通認識は、當然の結果として、政治を際立たせることになるのだが、阿壘は人間の生きる姿そのものを「政治」ということばで言い表したに過ぎない。また「概念」の空虚な「注入方式」(これはある意味では「啓蒙」の一種の姿であるかもしれない)に對する戒めも、阿壘の政治意識をよく表したのと言えよう。

別な言い方をすれば、阿壘の「政治」意識はとりもなおさず、創作する主體の側の在り方を規定する概念だつた。だから當面する政治的課題や任務に應える文藝創作よりも、主體である作家や詩人が現實と格闘する姿勢自體と、その格闘の中から生み出される苦惱の描出に傾斜していくのである。阿壘が綠原にはじめて胡風のことを紹介したと

きのエピソード<sup>(30)</sup>は、彼のこういう性格を如實に物語っている。彼は綠原にまず胡風の「死人復活的時候」を激賞したのだが、そこには次のような表現が書かれている。

憤慨してくれた人や氣をもんでくれた友に私は無論のこと感謝したが、私自身としては嫌惡の念があるばかりだつた。そして嫌惡の中にまた別な感覺も經驗した。私は確かに人の世の中で生きている、この私に對する憎しみから出た謠言がその證據なのだといふ感覺だ……この生きている世界の四方八方の觸手に接してみて、突如私がやはり一人で生きていることに氣づいた——私はいつたい一人の何者だ……前方にあるのが河ならば、渡つていくことができるし、イバラならば、血を流しても踏んでいくことができよう、しかし、前方はそんなものとはまるで違つて居るやうだつた。何一つないやうでもあり、また入り組んだ文様のある得體の知れない壁のやうでもあつた。私をもつとも苦しませて居るのは、こういう壁にすつかり取り圍まれてしまつて、平坦な道であるやうと小道であるやうと、私が今まで自分の歩を進めたことがなかつたやうに思われることだつた。<sup>(31)</sup>

一讀してわかるやうに、この作品には胡風の苦惱がはつきりと込められて居る。こうしたいわば悲觀的で感傷的な文章は、胡風の作品のなかではそれほど多くないのだが、まさにこの一編こそが阿壘の共感を強く呼ぶものであつたのだ。

ここに見られた胡風と阿壘の「政治」を巡る感覺の差異は、彼らの文學の質に大きな影響を與えるものであつた。つまり端的に言えば、その時期その時期の狀況に敏感に反應して文學の課題を見だし、臨機應變とも言える文筆活動をしていた胡風に對し、阿壘は、過酷な現

實を自己あるいはその時代の文學者に課せられた「宿命的状況」として捉え、その中に生きる自我の内面へ、内面へと創作の道を深めていったのである。

こうした方向が顯著となる時期こそ、四十年代であった。この時期、阿壠には、「文學」を「革命のプロセスにおける道具」と見る組織への理念的な同調と、文學創作自體を自分の人生の根元として位置づける文學者の資質とが同時に存在していたと思われる。そしてこれが常に、阿壠に激しい葛藤を引き起こす火種だったに違いない。

このような葛藤の痕跡は、阿壠のタゴールについての分析にその典型を見ることが出来る。

〔詩人の宗教〕においてタゴールが、「もしも私達が自分たちの想像する世界の中で生活することができるならば、私達は多くの寂寞を減少させることができるだろう」と述べた点について、タゴールのこのようなイメージは詩と人格において個人の到達しうる最高で最良のものだろう。しかし我々にとつて、戦闘と群衆の生活要求の觀點からすれば、これはまったく無用で、しかも有毒なものである。

タゴールの世界は神のまします高みであり、その心は廣大で渺茫たるものである。そんなものが我々にいつたいどんな關係があるというのか。

注目しておきたいのは、このように彼は一方で、激しくタゴール的な世界が現在の中國の鬭争に無縁だと言いつながら、また同時にタゴールの藝術世界の自然と人生の統一性に強く惹かれていたことを率直に告白している點である。

タゴール、その一首の小詩は一つの宗教哲學に等しい。その思

想、情感と生活は、我々の必要とするものとはまったく異なるが、彼においては、人と自然と神とが、おだやかにそして譲り合いつながら一つに融合されている。彼には彼の大きいなる抱擁があり、その詩には形象の力が備わっている。それは我が煩瑣な技巧論者の遠く及ばぬところである。

これは阿壠のタゴールに對するほとんど絶贊に近い評價である。一方、阿壠にはこうしたタゴール論に見られる拒否しつつも傾斜してしまふ方向とは逆の、傾倒していながら實作に反映されないという矛盾した傾向も見られる。この數年前に書かれた小説『南京』では、毛澤東の「持久戰論」をプロメテウスの火と頌えて勝利を確信する「序」を載せながら、小説の展開においてはそれがほとんど描かれていない。また、長編の詩「縛夫」でも、この詩に關する多くの論者の賞賛する「勝利への確信」よりも、「一寸の前進」の絶望的な困難にひたすら耐える状況が強調されているように私には思われる。組織の主導する革命が政治的に前進を見せていたとしても、文學者阿壠の精神はそれに單純に従つていくことができなかったと言えるのではないだろうか。

四十年代後期に、こうした阿壠の考察はますます深まっていたようだ。詩の象徴性や音楽性に對する彼の論文に、我々はその過程を讀みとることが出来る。

象徴とは詩の昇華した情緒によつてもたらされる意象であり、集中された力が向かつていく意象である。

象徴された事物は我々の鬭争を高度に集中したものである。或いは鬭争の歴史と社會から昇華されて現れたものである。故にそれは表象性を持ち、一讀してすぐに理解し納得するものである。

詩の音楽性は、詩の持つ情緒の進行状態と思想の流動の性格によつて決定される。それゆゑに詩は、おのずから一種の内在的な旋律を持つのである。<sup>28)</sup>

我々にとつて、言語はすでに理論的で客観的な性格を帯びた事物となつた。しかし音楽は、現代音楽に至るものまですべて、そのほとんどがこんなにも情感的で主観的なものなのだ。言語を一種の凝縮された状態の情感だとすれば、音楽は一種の蒸發した状態の理知だといふことができるだろう。問題はやはり同じである。<sup>29)</sup>

引用は阿壘の象徴と音楽そして言語に關するエッセイからであるが、これらの論調から、阿壘の詩論の基調を爲す論理が見えてくると思う。それは創作主體が精神的に充實していくとき、その情熱は必然的で、自然な要求のもとに爲される技巧性をもつて、詩を生み出すといふことにまとめられよう。またこうして生まれた詩には、必然的に自然な象徴性と内から滲み出る音楽性が付與される。一方、詩を生み出す詩人自身の思想は、個としての誠實さに満ちたものでなければならぬ。そしてこのような誠實な精神は、一個の人間としての自身自身を見つめることによつてのみ得られるものである。逆に言えば、その思想の中に、因習的なものや退嬰的なものの容喙を默認するような欺瞞が存在するとき、その詩は虚偽の情熱によつてこねくられた文字の配列となつてしまふ。これがいわゆる「客觀主義」の現れとして排斥される對象なのである。

現代の文學史記述においてよく見られる「政治内容を強調するあまり、詩の技巧を無視してしまつた」といつた阿壘に對する評價がまったく根據のないことは、もはや言うまでもあるまい。

#### 阿壘の四十年代における特異性に關する考察

#### 四 阿壘の詩

阿壘の詩論は、前章で見たように、「詩人の思想」||「主觀の情念」||「必然的な技巧」という要素の統一を理想とするものであつた。そしてこの統一を可能にするものは、創作主體である詩人自身の「個」に對する強烈な自覺であつた。

阿壘は、あらゆる文藝理論は實作を伴わねば無意味だとも述べているが、彼の詩は、まさにその文藝理論の結實と見ることが出来る。

長編小説『南京』執筆當時、つまり上海戦での負傷から、延安行きを挟む時期、阿壘の詩は戰闘の意欲に満ちたものだったが、一九四三年、張瑞と知り合つて戀におちるころから、阿壘は戰闘集團の一員としての自分よりも、個としての自己を創作の根底に据えるようになった。詩人阿壘の成熟にとつて、戀人であり後の夫人となる張瑞の存在は、戰闘集團の一員としての價值基準から、個人としての詩人自身をいつそう強く自覺させる引き金となつた。これをもつともよく表しているのは、次の詩である。

#### 題册<sup>30)</sup>

首先、我要活得像一個——人

其次、自然要活得像一個——男子

最後、我要活得像一個——兵

讓野薔薇開它自己的花——

讓荆棘長它自己的刺——

讓無花果結它自己的果子——

この張瑞のアルバムに記された彼の詩は、自分がまず人間であり、そして次に男であり、最後に戰士であると歌い、これに續く三行で、

あらゆるものたちがその存在なりの果實を得ることを祈るのだ。タ  
ゴールの影響の濃厚な作品である。

阿端が張瑞との愛を育んだ期間に残した詩は、どの一編をとつても、彼の以前の詩には見られない個の情念の燃焼と思索のさらなる深まりが讀みとれる。次に少々長い引用だが、二篇の詩を見てみたい。

琴的獻祭<sup>(29)</sup>

没有古清風明月

也没有秋蟲悲哭落葉

更没有小草小花底那羞怯濃艷的歡喜

這没有詩的日子！……

我甚至無弦。

(中略)

現在我是到了你這裏；

我才有了這一份真正的歡悅

因此乾枯得祇剩沙粒的兩眼會放光

鐵液一樣無情的泪滴會在微笑裏流出來

而微笑、注視你的時候如此美、

我要爲你撫奏！——

即使僅僅爲你、爲一個人

即使這琴不剩一弦。

願歌<sup>(30)</sup>

(前略)

不得已

也讓我們、我和你、蝸牛一樣爬行過去——

生命是過程

生命是運動

就讓我們、你和我、以生命不斷分泌在所

匍匐而來的道路之上

然後背後會有一個新的銀河系——

蝸牛自己底紆緩的銀色軌迹、

或者、用手劍以及手杖作支柱、我和你

或者、彼此好好牽扶地、兩個人、

——不

索性讓我以我底體力作爲另一只

你底、也是你自己底

血肉的腳！

「琴的獻祭」は詩のない無機的な日々を送り、創作の術も奪われようとしている詩人が愛するものを得た喜びとその愛の深さを歌うものである。次の「願歌」は愛するものと二人で歩む生命の過程の意義をカタツムリの歩みにイメージし、それを新たな銀河系への夢に結ぶ。注目したいのは、後半の二人の合一への意志である。「いやむしろ僕のすべての體力を使つて、僕を君のもう一本の、そして君自身のものとなる血肉の足にさせてほしい」という結びはたいへん突飛に見えるが、實は張瑞が先天的な足の障害を持つていた女性だったということを知れば、自然な情念の發露に心を打たれる。

阿端は愛情を彼の人生のもつとも深い部分に据えた。具體的には戀人への愛情だが、この愛の深さが彼の祖國への愛や同胞への愛を支え、そして敵への憎しみと戦闘への情熱をかき立てていく。もちろんこの情熱の方向が詩の方向であり、思索の方向であつた。詩の藝術性



の源であり、創作の自然な技巧を生む根源であつた。こうして彼の詩論は、彼自身の詩によつて裏付けられることとなる。

しかし一九四六年春、妻となつていた張瑞が突然自殺して彼のものを離れてしまふ。この自殺は各種の資料により、ある程度詳細がわかりかけている。それは一種の不自然な關係の清算のためのもので、その關係者はなんと阿壘の身近にいたのである。阿壘はこの衝撃に耐えず、そしてその詩の世界において、社會の本質を鋭い眼差して觀察し、自身の心の世界を飾ることなく省察していった。その基調を爲していったのは、次のような詩句であろう。

而在霧和冬的季節、在深夜無星之時、我不能看到你、我只在我底戀慕和向往的心情中看見你爲我留下的影子

(「孤島」より)

奪取吧、連我底落在妻底墓前的泪珠、那和清晨草間的露珠一樣無罪的泪珠

連我底撫摩孑然的孩子底頭皮的雙手、和那陽光一樣撫摩着他底頭皮的無罪的雙手

奪取吧、連我底詩、我底不可奪取的詩  
奪取吧、連我底一文不名的自由、連我底做做惡夢的自由。

(「去國」第三連)

我難道不是在我底祖國？然而這難道是爲我所屬的國？

這難道不是當我之前所展開的風景、這山、這江、這人烟和鳥影？然而這難道是爲我所有的國？

我到什麼地方去？

我從什麼地方來？——

(同第四連)

「孤島」は深い孤獨感に包まれた詩である。「霧と冬の季節」「深夜に星のないとき」などという表現は、單に妻を失つた状況の比喩ではなく、遙かにそれを越える深い感情のように思う。また「去國」の詩にいたつて、この孤獨感は「妻の墓前に流す涙を奪え」、「息子を撫でるこの手を奪え」、「私の詩を奪え」、「悪夢を見る自由すらも奪え」という、愛するものすべてを奪い去られる絶望となる。さらに、「私は私の祖國にいないはずはない。だがこれが私の屬する國だろうか。これが私の目の前に展開する風景でないはずはない。この山、この河、この人煙と鳥の影が。だがこれが私の有する國なのだろうか」という怒りと嘆きの中で、詩人は自分がどこからやつて来て、どこに行こうとしているのかという、自分の存在の根源を問いはじめるのである。

この時期にいたつて、阿壘の詩は「七月派」の他の詩人たちとは異なる、一種の哲學的な深みを持つたと言える。彼の詩の宗教的思索を見抜いた小論冒頭の評價は、この時期の思索に對するものといわねばならない。そしてこの時期の創作において、阿壘は胡風らの政治的「主觀主義」とは足場の違う、ある意味では力點の違う、文學における個としての創作主體を重視する一種のヒューマニズムの道を歩んでいったと見ることができよう。

このような文學の感性の違いについて、萬同林は阿壘自身は無意識だつたとする冒頭のような見解を述べているが、阿壘はやはり、明瞭にこの差異を意識していたように私には思われる。たとえば、阿壘はこれを「自分の筆力の至らなさ」として、少なくとも二度は嘆いている。最初は長編小説『南京』の描寫が「敗北主義の文學」と見られる可能性について、「事實を描ききる中にしか眞實の戦いの道はない」事が傳わらない點に關して述べたものだ。二度目は雑誌「呼吸」發表

の亦門署名の詩「珠」についての後書き「二期小結」である。

珠

被沉淹在海潮和叢礁間

被露曝在枯沙的長灘邊

白羽的海禽偶然也許啄取

而又和海藻一同向海波吐去。——

(第2連、3連、4連省略)

而那潛海者已經是留海底的綠藻所纏絡的整然一架白骨

而珠母、也早已成爲浪花和沙礫之類的一些空殼

索性被深海沉淹、被泥沙埋沒、被存在奔忘——

然而無法、珠子、它永遠是難于掩藏的一粒的光！

これは五連からなる詩で海の奥深く沈みゆく珠玉の眞實の光を歌うものである。繰り返す波のような詩句の配列と韻律に對する工夫は、引用した最初と最後の一連からでもすぐに讀みとられよう。第一連は珠をのみ込む海の描寫だが、ここでは「珠」という言葉自體が現れてこない。第二連は町の市場で、第三連では女性たちの裝飾の中で、第四連では詩人たちのサロンの中で、それぞれ眞實の「珠」が決して存在し得ないことを歌い、最終連で、すべてが空虚となる海底に沈みゆく珠玉に向かい、「いつそのこと深海に沈みゆき、泥砂に埋もれ、存在から忘れ去られてしまいたいのか……だが、どうしようもないことに、珠よ、それはいつまでも容易に隠すことなどできない一粒の光なのだ」と歌いかける。

この抽象的で難解な詩は、直接的には愛妻の消失を契機にしながら、眞理の探究の困難とその繼續の意志を表現したものと思われるが、「二期小結」(署名はないが彼自身が執筆したと見て間違いないだろう)

では、この詩に對して「詩の不幸」ということばが使われているのだ。この詩がたぶんあまり理解されないだろう、という阿壘のやり切れぬ思いが、この言葉には込められているように思う。阿壘が自分の性格と自作の詩の特異性を意識していたことは明らかであろう。

## 五 結び

これまで見てきたように、四十年代において阿壘は、理論的にも實作に於いても、一種獨特の業績を残してきた。このような文學觀をもっていた阿壘は、五十年代をどういふ感覺で迎えたのであろう。彼の胡風事件後のことに關しては、いくつかの論著があるが、事件發生までの數年間についてはわからないことが多かった。これを埋める意味で注目されるのは、阿壘の遺作集『風雨樓文輯』である。ここには、一九五〇年以後數年間の阿壘の隨筆がまとめられている。これらの文章は短文ながら、彼の鋭い觀察と權力に對する不屈の意志が輝いている。ここで最後にその中からいくつかを取り上げ、阿壘の文學者としての高潔な人格をたどつて、小論の結びとしたい。

語言

語言、帶有詩人自己底體溫。

詩人的體溫、感染了人。

不但是生活的語言、而且是性格的語言。

關於詩、關於風格、關於詩的語言——

那是：人格底聲音。

\* 傍點は阿壘自身による。

個性

取消個性——不可能。

個人主義、那當然是集體主義的對立物。  
但却不能把個人主義和個性全然混同來。

(中略)

集體不是桎梏、而是統一。

個性豐富集體、當它被解放出來、從必然裏獲得了自由的時候。  
集體發展個性、當它解放了個性、而又統一着一切、它就是那發展  
的動力、好象太陽帶着行星前進。

言語が「詩人自身の體溫を持つ」「生活と性格の言葉」であり「人格の聲」であるという主張は、前掲の言語論の延長にあるのだろうかと考えられる。この基本的な立場から阿壘は、消滅し得ない「個性」が「集體（＝集團）」の對立物であることを認めつつ、その集團とは桎梏の結果ではなく、個性と個性を結ぶ統一でなければならぬと説き、個性が解放されて自由を得たとき、はじめて豊かな統一が實現すると主張する。この論理は、文藝主體の獨自性を強く意識した四十年代の彼の論調にいつそうの拍車をかけ、さらに前進させたものとも言えよう。阿壘は彼を取り巻く文學界の全體主義的な閉塞狀況に全力で立ち向かっていたのである。

この當時の綠原の回想には、一九四九年第一次中華全國文學藝術工作者代表大會に参加するときの車中で、阿壘が「官僚主義」に對する嫌惡と怒りを露わにしていたというエピソードが紹介されているが、ヒューマニスト阿壘の目には、當時の權力の本質が赤裸々に映っていたものと思われる。餘談かもしれないが、このような文學者として阿壘を考えると、「三十萬言書」という形で權力の最高峰への直訴をした胡風のような方式は、阿壘の思想からは生まれぬものだったと思う。阿壘にとって、權力は直訴の相手ではなく、日々の生活の中で一歩一

歩切り崩して行かねばならぬ非人間的組織構圖であり、また、そうした日々の人生の戦いによつてしか、破壊することのできない宿命的な關係だったからである。

そして、阿壘が自作の詩「去國」などの中で預見した宿命の如く、一九五五年五月、阿壘は逮捕され、やがて「胡風反革命集團」の「骨幹（中心分子）」として斷罪されることとなった。

獄中のことについてはほとんどわからないが、彼の誠實な生き方を示唆するエピソードが一つ傳えられている。

阿壘は一九六七年春、天津監獄の中で病死した。名譽回復は死後十三年もたった一九八〇年、追悼會は一九八二年のことである。遺族はこの日、阿壘の遺骨を天津郊外の墓地に埋葬した。問題はこの「遺骨」が、それまでいっただいどこにあつたのかということである。普通、「反革命分子」の遺骨は願い出により遺族に払い下げられるか、ゴミとして処分されるかのどちらかだそうである。阿壘の遺族から見れば、文革初期の厳しい狀況下で、阿壘の死がわかつていたとしても、遺體を払い下げてもらうような感傷は危険すぎた。こうして親族がだれ一人タツチしない狀況で阿壘の遺體は處理されたのだが、實は、その遺骨はある公安關係者によつて密かに保管されていたという。もちろんこの間の事情を證明する文書も證言の録音もない。なぜその人物が上級の命令に逆らつて、密かに阿壘の遺骨を保管したのかということも明らかではない。しかし想像できるのは、これまで見てきたような阿壘の誠實な人柄、堅固なヒューマニズムの精神が獄中でも揺らぐことがなく、阿壘が死ぬまで彼の「監督」に當たっていたこの公安幹部を感動させたのではないだろうかということだ。私はそう思いたい。

注

- (1) 賈植芳(一九一五)作家、「胡風分子」として斷罪されて獄中生活を送った後、名譽回復、現在は文藝評論家として活動。上海市在住。引用は九八年夏に論者がインタビューした際の言葉。
- (2) 張中曉遺稿、路莘整理。上海遠東出版社、一九九六年二月、上海。
- (3) 阿壘(一九〇七〜一九六七)詩人、作家、文藝評論家。本名陳守梅、杭州出身。筆名、阿壘のほか亦門、S・Mなど多数。黃埔軍官學校卒、將校として三七年の上海戦役に出動、負傷した後延安にわたり、抗日軍政大學に學ぶ。胡風と知り合つて後、そのブレンとなつて複雑な環境下で多くの作品を書き、特に雜誌「希望」において優れた評論を續々と發表した。胡風事件で逮捕投獄され、天津監獄内で病死。主な作品に、報告文學集「第一擊」、後述の長編小説「南京」、詩集「無弦琴」、詩論「人與詩」「詩與現實」など。
- (4) 萬同林著、副題「胡風及其同仁們」山東畫報出版社、一九九八年五月、濟南。
- (5) 張中曉(一九三〇〜一九六六?)胡風事件の被害者中最年少の文學者。繊細な思索の跡を誠實に綴る隨筆を残したが、迫害されて病苦と貧困の中で死去。耿庸著「未完的的人生大雜文」(上海遠東出版社、一九九六年三月)に詳細な記載がある。
- (6) 萬同林著前掲書三九五頁
- (7) 同、四三二頁〜四三三頁
- (8) この指摘は萬同林著前掲書の巻頭(二頁〜三頁)に引用されたもの。全部で七項目。
- (9) 同、第三の指摘
- (10) 同、第四の指摘
- (11) 同、第五の指摘
- (12) 「中國現代詩論40家」(潘頌德著、重慶出版社、一九九七年九月第二版、重慶)において、著者は「當然、阿壘の詩論には偏向的な部分と不足の部分が少なからず存在している。まずはじめに阿壘は詩の政治内容を強調するあまり詩の技巧に對する重視が十分でなかった。…中略…第二に宗白華の『流雲』、馬凡陀の『馬凡陀山歌』などの作品に對する評論は適切さを缺き、これらを過度に輕んじている」(三九七頁〜三九八頁)と指摘している。
- (13) 「中國現代小説流派史」(嚴家炎著、人民文學出版社、一九九五年十一月第二次印刷、北京)の中で著者は、特に「七月派」を概説して、「創作實踐において…神經質で不正常的な方面に向かつてしまふ。…七月派の作家自身の持つ思想的、氣質的な弱點やある種のあまり健康的でないものなども人物の形象に投影している」(二九三頁)と指摘している。なおここでいう「弱點」とは、後の記述から見るとトーチエの思想などを指していることがわかる。
- (14) 「胡風回想錄」(胡風著、南雲智監譯、一九九七年二月、論創社、東京)一一六頁。
- (15) このような言い方には多々異論があると思うが、「主觀を重視する文藝觀」として理解されたい。
- (16) 舒蕪と路翎の緊密な關係は、各種の回想錄に詳細な記述がある。雜誌「呼吸」は一九四六年十一月成都で創刊(阿壘、方然編集、創刊號には巻頭第二論文と評論にそれぞれ舒蕪の文章が載っている。
- (17) 「箭頭指向」(「詩與現實」阿壘著、五十年代出版社、一九五〇年十一月、北京)第一卷十一頁。
- (18) 同、十二頁。
- (19) 同、二六頁。
- (20) 同、三八頁。
- (21) 「民族革命戰爭與文藝」胡風著(『胡風評論集』、人民文學出版社、一九八四年五月、北京)中卷七二頁

(22) 同、七三頁。

(23) 延安文藝講話との特徴的な相違点は農民階層に對する見方、たとえは農民階層の「落後性」を鋭く分析した次のような箇所に見られている。「農民意識そのものとしては、歴史はおろか自分自身さえもはっきりと理解することのできないものである。農民の文藝鑑賞の能力において、非農民の赤い糸を明確に貫くことを忘れてはいけない……」農民が絶對多數を占めている「ことだけを見て、彼らが、決定的な作用をもっている」として、成長しつつある民間形式や農民の鑑賞能力の前に旗を掲げて降参してしまふことは、民族解放は無論のこと民族形式の創造においてすら、「足を引つ張る」作用があつたとしても、何ら「重要な」「任務」の「達成」など到底できらぬものではないのだ」(「論民族形式問題」前掲中卷二五四頁)ここに見られる農民観は確かに重大な相違点であり、延安文藝講話路線から大きくずれていると見ることができが、「自己改造と大衆啓蒙」を重視する基本的な方向において、両者は合致していると考えてもいいのではないか。

(24) 胡風の柔軟な考えの一例として「舊瓶新酒」に關する論調をあげておく。胡風は「民族革命戰爭與文藝」において、創作上の表現について、「啓蒙的な大衆文化の要求に應えて大衆文藝の空前の發展があつたことは誰にもよくわかることだ。戰爭の任務に突き動かされて、そして自身の身を投じたところの民衆の要求に突き動かされて、作家たちは民衆の熟知している言語、或いは民衆の受け入れることのできる言語を使つて、民衆を教育し、民衆を動員するような作品を創作せざるを得なかつた。我々は各種の小さな「新」形式の讀み物を持つた。我々は鼓詞、相聲、唱本から舊劇等々まで、いわゆる「舊瓶裝新酒」の舊形式の作品を持つに至つた」(前掲「胡風評論集」中卷七七頁)と述べて「舊瓶新酒」の効用を指摘しているが、「論民族形式問題」(同、中卷二二八頁)では現在の「舊瓶新酒」理論として、向林冰らの「單純

阿壘の四十年代における特異性に關する考察

な民間形式原泉論」を批判している。

(25) 「我們今天需要政治內容、不是技巧」阿壘著前掲『詩與現實』第一卷四一頁。

(26) 同、四四頁

(27) 「胡風和我」綠原、『我與胡風(胡風事件三十七人回憶)』(晴風編、寧夏人民出版社、一九九三年、銀川)所收、五一—五三頁。

(28) 「死人復活的時候」胡風著前掲『胡風評論集』中卷四一一頁。引用部分分は「胡風は死んだ、胡風は漢奸だった」というデマに關する胡風自身の感慨。

(29) 「想像片論」阿壘著前掲『詩與現實』第二卷二〇九頁。

(30) 同、二二〇頁。

(31) 「形象化片論」阿壘著前掲『詩與現實』第二卷二二二頁。

(32) 阿壘の長編小説『南京』(一九三九年十月校了)は後に名譽回復後の記念的出版物『南京血祭』(人民文學出版社、一九八七、北京)として刊行されたが、これは原稿ノートを整理して起こしたものである。當時の政治状況を反映してか、著者阿壘と元の小説に關する説明が一切なされていない珍しい形で出版されている。關連記述は、前掲『胡風回想錄』(邦譯二六八頁—二六九頁)、論文としては『阿壘詩集』(秋吉久紀夫譯編、土曜美術社、一九九七年三月、東京)所收の「阿壘と火野葦平の戰爭文學」(秋吉久紀志、阿壘『南京』とその問題點)(拙論、慶應義塾大學藝文學會「藝文研究」第五十六號、一九九〇年一月)など、邦譯は拙譯により『南京慟哭』(五月書房、一九九四年十一月、東京)などがある。

(33) 七月詩叢『無絃琴』(筆名亦門、希望社、一九四二年八月、桂林)所收。八連からなる長編の詩。第一連は次のような詩句である。「嘉陵江；風、頑固地逆吹着；而那大木船；衰弱而又懶惰；沉湎而又笨重；而那紳夫們；正面着逆吹的風；正面着逆流的江水；在三百尺遠的一條

鐵錘之前；又大大地——跨出了一寸的腳步！……」この詩の中で「一寸」は十七回使われており、他に「一里」「二歩」などわずかな前進を表す言葉が多数使われている。

おける口頭發表をもとにまとめたものである。

- (34) 「象徴片論」阿壘著前掲『詩與現實』第二卷一一〇頁。
- (35) 「技巧片論」阿壘著前掲『詩與現實』第二卷二〇六頁。
- (36) 「音樂性」片論」阿壘著前掲『詩與現實』第二卷二二二頁。
- (37) 前掲注(12) 參照。
- (38) 阿壘詩集『無題』(顏家文編、湖南文藝出版社、一九八六年五月、長沙) 所收、一九四四年作。
- (39) 『白色花』(綠原、牛漢編、人民文學出版社、一九八一年八月、北京) 所收、一九四六年三月二六日作。
- (40) 前掲阿壘詩集『無題』所收、一九四四年三月十一日作。
- (41) 前掲『白色花』所收、一九四六年作。
- (42) 同、一九四七年五月二日作。
- (43) 前掲阿壘著『南京血祭』二一六頁。
- (44) 雜誌「呼吸」創刊號(呼吸社、一九四六年十一月、成都) 五二頁。
- (45) 同、十六頁。
- (46) 副題「阿壘遺稿」阿壘著、路華編、時代文藝出版社、一九九九年一月、長春。「讀書週報」六六七號(文匯報社、一九九七年十二月六日付)に紹介の特集記事がある。
- (47) 同、九〇頁。傍點に關しては、前記「讀書週報」特集記事の阿壘直筆により確認した。
- (48) 同、五六頁。
- (49) 「記阿壘」綠原著『葱與蜜』(三聯書店、一九八五年十二月、北京) 三八頁。

(付記) 本稿は、早稻田大學で行われた日本中國學會創立五十年記念大會に